

ウイメンズセンター大阪におけるからだと性の相談事例研究

全国一斉電話相談の更年期（40～60代）女性の事例から

1. ウイメンズセンター大阪における相談活動

ウイメンズセンター大阪は、セルフ・ヘルプの視点から女性のからだと性の問題にとりくむために、女性有志によって1984年に作られた民間団体である。そこでの相談活動は次の3つのセクションで行われている。

(1) 女・からだ110番

産婦人科領域の問題を中心とする、女性のからだについての電話相談。月経や更年期や、膣炎・子宮筋腫などの生殖器におこるトラブルなどについて、聞いて欲しい、力を貸して欲しいという相談である。

(2) からだと心の相談室

子宮筋腫の手術をするべきかどうか迷っている、出産について話がしたい、中絶手術前後の不安、セックスについて、外性器の形がおかしいという悩み、またセカンドオピニオンのための産婦人科医療機関の紹介なども含めて、様々なからだの問題を、女性が自分の問題としてしっかり向き合うための相談である。

(3) 個人カウンセリング

男性との関係、女性との関係、親との関係、子どもとの関係、その他の関係でも、女性であるがために生きにくさを体験してきたり、心のバランスを崩したりする。今までの女性のセクシュアリティについての通説に疑問を投げかけつつ、女性が生活しやすくなるようにサポートする相談。

2. 更年期の相談

上述のような10年来の相談活動の中で更年期の年代にあたる女性の相談をみると、多くの女性にとって、40歳～60歳というライフステージは、それまでのからだや気持ちや生活のツケが吹き出してくる時期であると感じる。我慢の限界に達し、爆発するというのを多くの女性が相談の中で語っている。たとえば姑からの悪口、夫の浮気、子どもの悪態など、それまでは通り過ぎてきたことが、耳に残っていく。と同時に更年期特有の不定愁訴とのつきあいがある。「更年期は人生最良のとき」という言葉も聞くが、本当にそうだろうか、からだと気持ちとが訴える。また医療に関しても、更年期の時期の女性は、産婦人科、内科、外科、整形外科、精神科と病院巡りをするが、いっこうに良くならない。なのに、周囲からの要求や期待は依然として繰り返される。このような女性の実態が電話相談や面接相談からみえてくる。とても医療機関だけの解決では不十分だろう。

更年期の問題をとらえるとき、女性個人と医療機関の関係だけではなく、それ以外の機関や人との関係も必要であることを、これまでの活動の中から考えてきた。そこで、女性のからだと性の問題を医療的側面だけではなく、社会的側面からもとらえられるように、医療機関や女性センターも含めた全国の12の異なる団体で「女のからだと性・全国一斉

電話相談」を98年11月に実施した。それまで各団体は独自の方法でそれぞれの相談活動をしてきたが、共通の趣旨で共通のケースシートを用い、検討分析することで、より客観的に女性のニーズが見えてくるのではないかと考えた。ウイメンズセンター大阪の提起により、次の全国16カ所の地点で行った。札幌、仙台、秋田、東京、新潟、静岡、名古屋、京都、兵庫2カ所、大阪2カ所、岡山、徳島、北九州、沖縄。

女性のからだ性と性の悩みはどんなもので、何が問題なのか、何がどこで解決できていて、何が解決できていないのか、今後必要とされるものは何なのか、などを考えるために、また全国的な行動が、様々なレベルでのネットワークを広げて、女性のからだ性と医療、生活をつないでいくことに繋がっていくことを期待して。

今回の更年期女性の先行事例研究にあたり、この全国一斉電話相談の中から、更年期およびその年代の女性の問題をみてみた。

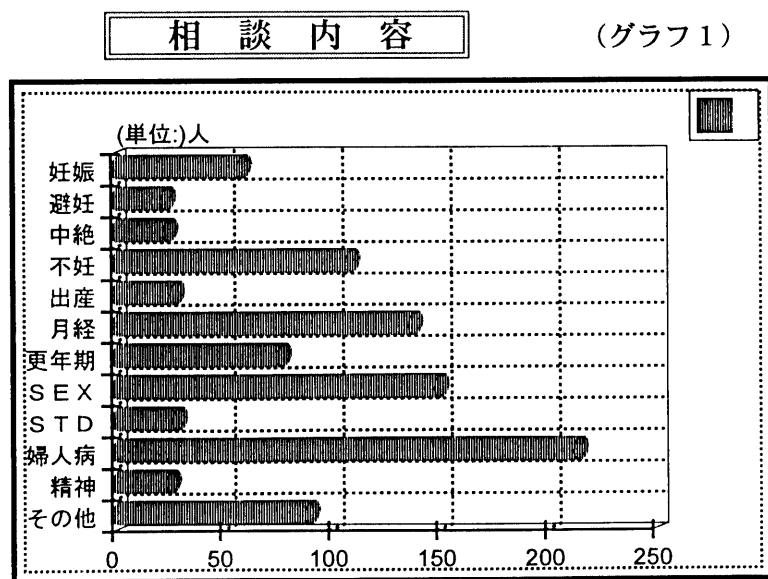
3. 「女のからだ性と性・全国一斉電話相談」の結果から

相談総件数770件のうち、男性からの相談等を除いて分析可能なのは753件分であった。この753件について、更年期あるいは40代、50代、60代の中老年女性のからだ性と性の相談実態をみた。

相談の記録シートでは、相談内容を「妊娠・避妊・中絶・不妊・出産・月経・更年期・セックス・STD・婦人科の病気・精神・その他」の12項目に分類し、相談員が複数回答で記入した。(グラフ1)

最も多かった相談は、子宮や卵巣など女性に特有の「婦人科の病気」で、次いで「セックス」「月経」「不妊」の順であった。「更年期」に分類されたものは全体の7.9% (957件中76件)であり、その年代内訳をみると、30代が1件で、残る75件は40、50代であった。更年期との相談は年代との関係が非常に明確である。

妊 娠	58 人
避 妊	23 人
中 絶	24 人
不 妊	108 人
出 産	27 人
月 経	137 人
更年期	76 人
S E X	149 人
S T D	28 人
婦人病	213 人
精 神	25 人
その他	89 人
合 計	957 人



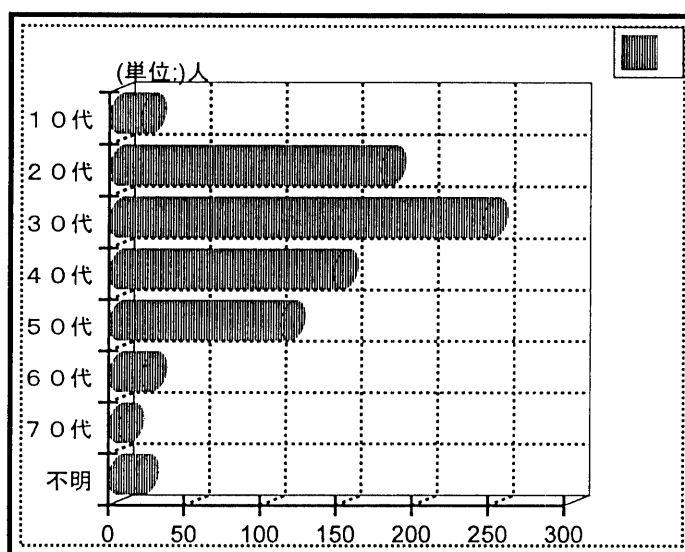
(相談別件数957件複数回答)

一方、相談全体を年代別でみると(グラフ2)、40、50、60代を合わせると全体の37.6% (753件中283件)を占めている。また相談内容も、40、50代に関しては「月経」「更年期」「セックス」「婦人科の病気」の項目が多いものの、12項目すべてにわたって相談がある。中高年女性のからだ性と問題を単純に「更年期」という分類概念だけではとらえきれないことがわかる。

年代別相談件数

(グラフ2)

10代	21人
20代	179人
30代	246人
40代	148人
50代	113人
60代	22人
70代	7人
不明	17人
合計	753人



(相談別人数753人)

相談内容について

以下に、「更年期」に分類された76件の相談と、283件の「40・50・60代の年代の相談」の二つの角度から、事例を紹介しながら詳しくみる。

(1) 「更年期」の相談内容について

「更年期」76件の相談内容は主に次の5つに分けられる。

- (1) 更年期とは何か、また自分がかかえている症状は更年期なのかという疑問
 - 「めまい、夜中に動悸、頻尿、ストレスなどがある。更年期障害か？」
 - 「半年前から生理不順。更年期に入ったのか？ 更年期にはどんな症状があるのか？」
- (2) 更年期の治療(HRTなど)についての疑問
 - 「かかりつけの内科医にHRTを勧められたが、副作用等の説明がなく不安」

「めまいがして婦人科、耳鼻科の診察を受けているが、よくなるない」

(3) 閉経と妊娠の心配

「7ヶ月間生理がこないなので妊娠ではないかと不安。閉経か？」

「避妊はいつまで必要か？いつ閉経とわかるか？常に月経に対する準備をする煩わしさ」

(4) セックスとの関連

「閉経後のセックスは癌の原因になるか？」

「性交痛があって性生活が苦痛」

「セックスレスが更年期障害の原因になるか？」

「セックスをした方がホルモンが出るか？」

(5) 生活の諸問題との関連

「息切れ、動悸がひどい。病院にも行ったが薬がだんだん効かなくなっているような気がする。軽い家事もできず、暗いトンネルの中にいるよう。子供のことで心配なことがあり、それがきっかけだと思う」。

「汗が吹き出るようになった。同じ頃、隣人から洗濯機の音がうるさいと怒鳴られ不眠になった。親の介護を二人の弟から押しつけられ、自分のからだも弱いのにノーと言えない」

「子供二人かかえた人と結婚し、がむしゃらに生きてきた。地震で家も全壊。冷え、のぼせ、肩こり、胸痛、しびれ等の不定愁訴で困っている」

(2) 「40・50・60代」の相談内容について (表1参照)

① 婦人病について

「婦人病」の相談の4割は40, 50代が占めている。膣炎、ガン、ポリープ、子宮内膜症、子宮筋腫、子宮脱、卵巣の病気、乳ガンなど、女性生殖器に関連した病気はたいへんに多い。たとえば子宮筋腫は35歳以上の女性の3人に一人は持っていると言われていている。またこの年代頃になると、それらの疾患を理由とした子宮全摘などの手術を考える時期にもなっており、さらに問題をかかえる。「膣からピンポン玉みたいなものが出ている。医者に行くと子宮脱と言われたが、手術はどんなふうにするのか？」(58歳)

「子宮筋腫があり、腹痛や生理時に血の固まりが出るが、母の世話で自分の治療に行けない」(44歳)

② セックスについて

「セックス」に関する相談もまた多い。性交痛や子宮全摘後のセックスの不安などの他、夫との関係性やそれまでの生き方が問われる問題が浮き彫りにされている。「子宮全摘術を受けてから夫とのセックスがうまくいかない。手術の時、言わなくてもわかっているだろう、と夫からいたわりの言葉もなかった」(47歳)「夫が浮気している。他の女性とセックスができて私とできないのは、私のからだが悪いのか？」(52歳)「セックスは義務と今まで受け入れてきたが、夫の浮気がわかってからは苦痛」(46歳)

③ 月経について

「月経」の相談では、月経不順と閉経との関係や、またガンなど病気との関連の心配が多い。また、自分の月経の相談ではなく娘の月経についての心配で相談をしてくる女性も、これらの年代には多い。「月経がダラダラあるのは更年期か？あるいは筋腫のせいかな？」（42歳）「28歳の娘が受診して注射をしても、生理がない」（58歳）「24歳の娘が低体温で、妊娠できるか不安」（55歳）

④ その他

「妊娠」「避妊」「中絶」「不妊」「出産」の項目の相談件数は少ないが、それぞれに深刻な問題を含んでいる。妊娠の不安や避妊の問題、そして出産も中絶も完全に閉経するまで起こり得る。また、生殖技術の発達によって、40歳を過ぎても不妊治療を受ける女性は増加していると考えられる。それらと、更年期という心身の変化の時期とが重なるのである。「中絶して50日たつが月経がこない。妊娠したのか？これまで2回中絶したが、セックスを断れない」（45歳）「不妊治療をしてきたが子供はあきらめた。2、3年前から更年期で辛い」（45歳）「産後5ヶ月。息苦しさが続き眠れず不安。人に更年期障害と言われる」（43歳）

どこに（誰に）相談しているか？

（表2参照）

今回の電話相談に掛けてくる前に、医療機関を受診したり、どこか（誰か）に相談したかを聞いてみた。全体では約40%（937件中381件）の人が医療機関を受診している。また約23%（937件中216件）の人は夫・友人・家族など身近な人に相談している。一方、保健所・女性センター・その他の公的機関に相談しているのは、全体のわずか3%（937件中32件）にすぎない。

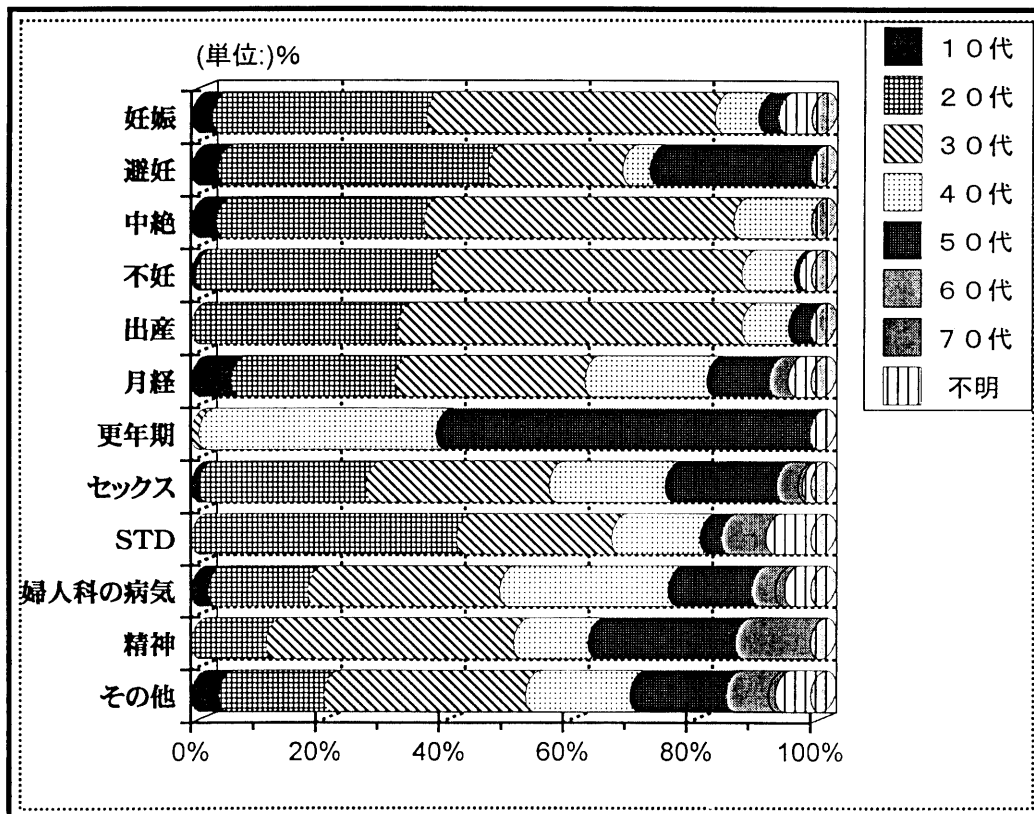
また、「どこにも相談していない」人が120名いる。

以上の傾向は、40～60代においてもほぼ同様であるが、夫・友人・家族など身近な人への相談の割合は、若干低くなっている。つまり年齢が上がるほど、身近な人には相談しないと見える。

年代と相談内容

(表 1)

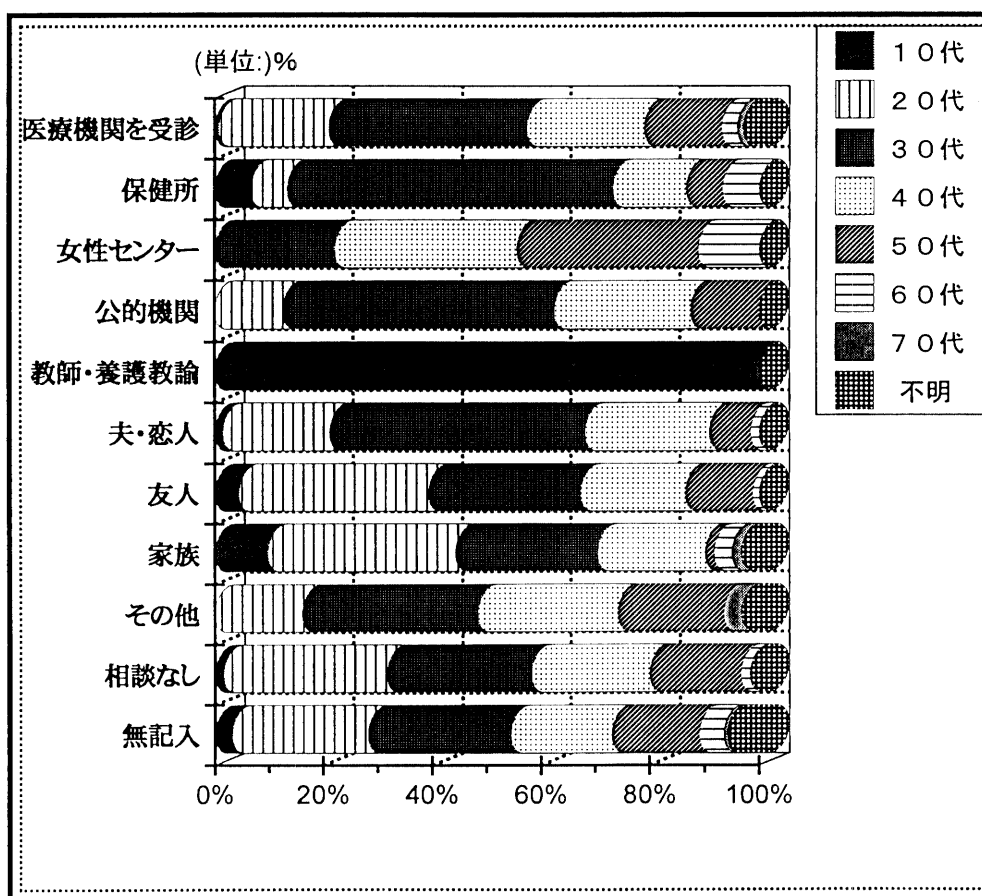
	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	不明	合計
妊 娠	2	20	27	4	2	0	0	3	58
避 妊	1	10	5	1	6	0	0	0	23
中 絶	1	8	12	3	0	0	0	0	24
不 妊	1	41	54	9	1	0	0	2	108
出 産	0	9	15	2	1	0	0	0	27
月 経	9	36	42	27	14	4	0	5	137
更 年 期	0	0	1	29	46	0	0	0	76
S E X	2	40	44	28	27	5	1	2	149
S T D	0	12	7	4	1	0	2	2	28
婦人科の病気	6	34	66	58	29	8	3	9	213
精 神	0	3	10	3	6	3	0	0	25
そ の 他	4	15	29	15	14	6	1	5	89
総 件 数	26	228	312	183	147	26	7	28	957



年代と相談機関

(表 2)

	10代	20代	30代	40代	50代	60代	70代	不明	合計
医療機関を受診	3	77	139	82	54	11	4	11	381
保健所	1	1	9	2	1	1	0	0	15
女性センター	0	0	2	3	3	1	0	0	9
公的機関	0	1	4	2	1	0	0	0	8
教師・養護教諭	1	0	0	0	0	0	0	0	1
夫・恋人	1	13	31	15	5	1	0	0	66
友人	4	31	25	5	11	1	0	0	89
家族	6	21	16	12	1	2	1	2	61
その他	0	5	10	8	6	0	1	1	31
相談なし	2	36	32	26	20	2	0	2	120
無記入	5	39	41	29	25	7	1	9	156
総件数	23	224	309	196	127	26	7	25	937



4. 考 察

まず「更年期」をどのようにとらえるかによって、相談ケースの分析は大きく異なってくる。今回の電話相談ケースシートに用意した分類項目は、全年代を通じて起こる女性のからだの、どちらかという医学的分類と言える。これに従えば、「更年期」の相談はごく限られたものになる。それでもその内容をみると、単に医学的身体的な問題だけでは決してなく、女性の生活をまるごと抱え込みながら、更年期特有の諸症状に悩んでいることがわかる。ウイメンズセンター大阪における更年期の相談でも、女性のそれまでの人生の様々な問題とからまって現れてきており、医療機関だけでは解決しないことは先に指摘したとおりである。従ってここでは、更年期を「40～60代女性のからだと性の問題」として考えたい。そして相談者の年代が40、50、60代のケースをみていくと、「更年期」以外にも妊娠・避妊・不妊・出産・病気などすべての項目におい相談がある。決して「更年期」が閉経期前後の短期間の問題だけではなく、生涯を通じた女性の健康問題としてとらえる必要のあることがわかる。

女性の生き方は働き方も含めて年々多様になってきており、40～60代の女性も例外ではない。子育てが終わって「空の巣症候群」におちいる女性もいれば、不妊治療を続けている女性もいる。親の介護に疲れていたり、夫とのそれまでの関係性に疑問を持ち始めたりもするかもしれない。そしてすべての女性に一樣に女性ホルモン分泌の低下という生理的な変化が訪れ、生殖器のトラブルも起こりやすくなる。それらの変化の現れ方や受け止め方は、女性の生活のありようを抜きには十分理解されないはずである。更年期を決して医療の領域だけでとらえてはいけないのではないか。もし医療機関で解決されるのなら、これほど多くの「婦人科の病気の相談」が、このような電話相談にはかかってこないはずである。

では医療機関を補う他の機関とは何かを考えたとき、現在の保健所や女性センターがほとんど機能していないことを、この電話相談は示している。各地の保健所や女性センターで更年期に対する教育・啓発事業が行われているが、今一度そのあり方を考えるべきではないだろうか。からだと性の相談を「医療」という専門分野ととらえ、回答を与えたり専門的情報提供や医療機関の紹介を重視するとしたら、いつまでも女性にとっての本当の力にはなり得ないのではないだろうか。女性が求めているのは、「私の話をしっかり聞いてくれて一緒に考えてほしい。問題を私が解決する力を引き出して欲しい」ということではないのか。

更年期を含む中高年女性のからだと性の相談においては、医療専門家であることが必要なのではなく、また医療専門家ではいけないのでもなく、どこまで女性の社会的状況を理解し、生活背景を尊重して、一人一人の女性が状況を「変える力」を持っているのだということを、相談にあたる者が信じられるかどうかを最も大切であると思う。それが真のエンパワーメントではないだろうか。

↓ 検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用 ↓
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります

ウイメンズセンター大阪におけるからだ性と性の相談事例研究
全国一斉電話相談の更年期(40～60代)女性の事例から